



巻頭言

我が国の中央アジア交流と環境問題

中央アジア・コーカサス研究所所長 Dr. Tetsuji Tanaka
国連大学学長上級顧問 田中哲二

最近時 中央アジアは二つの具体的な点でかつての西側世界の注目を集めつつあります。一つは、石油・天然ガス及びウランとレアメタルのロシア以外の市場への供給地として成長しつつあること、二つ目は、9・11事件以降紛争地化したアフガニスタン及びイラクへの軍事的戦略基地及び復興支援物資の兵站・輸送ルートとしての地政学的重要性が再認識されたことです。

わが国は、1991年に旧ソ連邦から独立したこの地域の諸国に対し、特に90年代にはほぼ一貫して第一位のODA供与国として関与して来ました。あまり国民一般には認識されなかったかも知れませんが、実は政府の基本的な同地域外交方針として、「ユーラシア地域外交方針」（1997年7月 橋本首相）、「中央アジア＋日本対話フォーラム」（2004年8月 川口外相）、「自由と繁栄の弧」構想（2006年11月 麻生外相）等が繰り返し表明されて来ました。こうした我が国の中央アジア交流姿勢が、旧ソ連の分業体制から切り離されて混乱していた新独立国の経済再編と、いわゆる中国の裏庭・ロシアのわき腹地域における親日国家群の保持・育成に相応の効果をもたらしてきたことは疑いのないところです。

今後の我が国の中央アジアに対するより具体的な関心は、①エネルギー資源とウラン・稀少金属の開発輸入、②アフリカとともに、中国、ヴェトナム、インドの次の直接投資市場としての位置付け、③シルクロード観光の拡大と観光インフラへの投資、④相対的に減少するODAの内容の効果的見直し、といった点に向けられるでしょう。

①に関して言えば、我が国と中央アジアの経済関係は資源開発だけに偏らないほうが望ましいし、開発行為そのものも資源の保全・持続性と環境問題に十分に配慮したものであることが望ましいでしょう。また、④に関して言えば、ODAの総額の縮小に合わせて内容的にこれまでの高額プロジェクト・箱物中心から、技術援助、人的援助、環境・医療・教育支援といったジャンルに軸足を移していくことに必然性があります。

このように、環境問題が今後の日本の対中央アジア交流の最重要なテーマの一つになることはほぼ間違いないところです。より具体的には、①日本の環境対応経験の紹介、②最先進環境技術の移転、③現地即応の環境技術の開発支援・共同開発、④環境問題対応人材の育成支援等ということになります。

現在、中央アジアにおける環境問題は大まかに見て三つのジャンルに分けることができます。すなわち、①旧ソ連時代の政策の負の遺産（アラル海干害問題、セミパラチンスクの残留放射能問題等、かつてウラル山脈以東・中央アジアは「ソ連のゴミ捨て場」などと揶揄されたこともある）、②産業開発・資源開発に伴う公害型環境問題（ソ連時代から続く重工業地帯の空気汚染、排水汚染、既開発の小規模ウラン鉱山の密閉不十分等）、③気象など地球環境変化の影響（氷河消滅＜氷河湖の決壊＞、砂漠化の進行、生物多様性の後退等）です。前二者の中には日本の保有する技術・経験によって対応可能なものが数多く含まれていると考えられています。

当面、経済開発独裁を担う中央アジア各国の権威主義的政権は、グローバル化する環境問題に第一級ないし緊急の政策プライオリティーを置くに至っていないし、その余裕もないのが現状です。そうした折だけに、基本的に政治・軍事的な野心を伴わない我が国の経済・技術援助活動の中でも、環境問題支援は中央アジア域内の国々が安心して受け入れることの出来るこの上なく重要かつタイムリーなテーマであることを認識すべきです。

さらに言えば、中国・朝鮮半島経由とは言え、千年以上も前に今もその一部が奈良・東大寺正倉院に残っているような西域文化を我が国に伝えてくれたシルクロード・天山北路域に対し、現代の日本の進んだ産業技術や環境保全技術が逆流していくことは、歴史の必然でありかつミレニアム単位での恩返し文化交流なのだと思えるくらいの大きな視点が欲しいところでもあります。